



「かよわくて、きつとつよい」 ～今日の一步、踏み出す勇気～

7月に函館で開催される
日本子ども虐待医学会学術集会のテーマを考えた

函館中央病院小児科外来看護師長 **平田 恵子**

警察庁は2月7日、2018年に虐待を受けた疑いがあるとして、全国の警察が昨年、児童相談所に通告した18歳未満の子どもの前年比22・4%増の8万104人に上ったと発表した。統計のある04年から14年連続の増加で、初めて8万人を超えた。児童虐待に対する社会の関心が高まったことから、警察への相談や通報が増えたことによるものだが、幼い子どもの命が犠牲になるケースは後を絶たない。

小児救急医療ワークショップにジョイントして設立された「日本子ども虐待研究会」が発元点子ども虐待における医学的な取り組みの向上と子ども虐待に関する調査・研究、知識の普及をはかり、関係機関と連携して虐待・ネグレクト家庭を支援し、子ども虐待予防を推進することを目的とし、さらに専門職の育成を目指し、わが国における子ども虐待を専門的に研究する団体が「日本子ども虐待医学会」だ。

医学会の出発点は、2009年小児救急医療ワークショップにジョイントして設立された「日本子ども虐待研究会」。研究会第1回目の参加者は80人ほどだったが、その後の参加者は増え続け、昨年の第10回学術集会には500人を超える関係者が香川県に集まった。今年7月に開催される第11回日本子ども虐待医学会学術集会は函館が会場となる（大会長は函館中央病院小児科の石倉重矢子医師）。

その第11回学術集会のテーマは、「かよわくて、きつとつよい」。今日の一步、踏み出す勇気。このテーマを考えたのは函館中央病院小児科外来看護師長の平田恵子さんだ。

院内児童虐待防止委員会の設立当初からのメンバー

平田さんは天使女子短期大学衛生看護学科（現天使大学看護栄養学部看護学科）を卒業後、天使病院（札幌市東区）を経て、函館中央病院の手術室で13年間勤務した。その後は結婚や出産で看護師の仕事

を離れていた時期はあるが、同病院に復職後は整形外科外来、そして2009年から小児科外来を担当してきた。

全国各地で虐待防止のための様々な取り組みが行われているが、同病院は10年に児童虐待の防止と早期発見を目的とした「院内児童虐待防止委員会」を設置し、虐待の早期発見と保護者への子育て支援を通じて予防活動を積極的に推進してきた。平田さんは委員会設立当初からのメンバーだ。「虐待の見直しを避けることが委員会設立の大きな目的で、虐待の前段階で拾い上げることができる先手の虐待予防の仕組み作りにも取り組んできました」。

虐待の問題は医療だけではなく、福祉や保健、教育、法律、司法など、多様な領域に関わる問題であり、予防・対応のために各領域の連携が不可欠である。「病院における虐待は小児科だけが遭遇するものではありません。子どもが小児科以外の診療科を受診している場合もあります。院内の連携は不可欠です。他の診療科からの

相談も少なくなく、判断に迷うケースは入院観察を試みたり、異常が認められるようなときには医師や医療福祉相談室（児童虐待防止委員会事務局）へ連絡をしていました。緊急対応の必要性が高い場合などは直ちに児童相談所や警察へ通報をするなど、その状況によって最善の方法が実行できるようにしています」。

か弱いのは子どもだけではなく私たちが小さな一歩を踏み出す勇気が必要

函館で開催される学術集会のテーマは、院内児童虐待防止委員会のメンバーがそれぞれ考えてきたものから選ぶことになった。「私が考えたのは『強い』と『弱い』、『明るい』と『暗い』など、反対語になる言葉を並べることでテーマをつくりました」。

「子ども」と「大人」の組み合わせもそのひとつだった。「子どもは弱い存在で、大人は強い存在です。子どもと大人はその前提でバランスが保たれています。が、

それが崩れたときに虐待という現象が発生します。子どもは決して『か弱い』だけじゃありません。困難に耐えて、手を差し伸べてくれる大人に出会うまで強く生きています」。

か弱いのは子どもだけではなく私たちが小さな一歩を踏み出す勇気が必要だと平田さんは言う。それがサブテーマの『今日の一步、踏み出す勇気』となった。

第11回日本子ども虐待医学会学術集会は7月27日と28日の両日、サン・リフレ函館（函館市大森町）を会場に開催される。